京都大学総合博物館平成三十年度特別展・文化財発掘Ⅴ

発掘 乾山窯

Kenzan-ware Workshops and Kilns: An Archaeological Perspective

2019

ごあいさつ

京都大学構内から出土した埋蔵文化財を紹介するシリーズ「文化財発掘」の５回目は、病院構内出土の乾山焼（けんざんやき）に光をあてた展示を企画しました。乾山焼は尾形乾山によって生み出された江戸時代中期のやきもので、陶磁器の世界に新風を吹き込みました。京都西北部の鳴滝の地に窯を築き、のちに鴨川の東に位置する聖護院へ移動して、やきもの作りを継続します。病院構内の発掘調査で出土した乾山焼は、この聖護院窯に関わるものです。

今回の企画では、聖護院および鳴滝出土の乾山焼を一堂に会して展示いたします。両窯で製作された乾山焼には、どのような違いや共通性があるのでしょうか。乾山焼の源流となった押小路焼（おしこうじやき）、乾山の庇護者ともいえる二條家の邸宅跡出土品もあわせて展示することで、窯跡遺跡からの乾山焼の実像を探ってみます。

窯跡遺跡からの出土品の多くは完成に至らなかった未完成品で、伝世品に見られるような華々しさは持っておりません。しかしながら、その地で作られたことを確実に示す未完成品や窯道具は、乾山焼の実像を新たにさせる可能性を秘めています。本展が、乾山焼に対する理解を深める機会となることを期待します。

例　　言

- 本冊子は、京都大学総合博物館において、2019 年２月 20 日～４月 21 日に開催する平成 30 年度特別展『発掘　乾山窯』（文化財発掘Ⅴ）にあわせて、展示解説として作成したものである。
- 京都大学文化財総合研究センター所蔵資料の写真は、寿福滋氏（寿福写房）の撮影による。ただし、表紙写真は越田悟全氏の撮影による。
- 以下の掲載写真は、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、立命館大学文学部考古学･文化遺産専攻、同志社大学歴史資料館より、画像データの提供を受けた。
  １．京焼の源流：（公財）京都市埋蔵文化財研究所、２．鳴滝乾山窯跡の発掘調査・５．錦炭窯の復原と焼成実験：立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻、６．尾形乾山と二條綱平：同志社大学歴史資料館
- 挿図 3-7（p. 7）は、鈴木半茶「猪八乾山の作品と陶器密法艸（下）」『陶説』28、1955 年に拠る。
- 本冊子は、京都大学文化財総合研究センター全員の協力のもと、千葉豊が編集した。

謝　　辞

本展覧会を開催するにあたり、以下の皆様に多大なるご協力とご助言をいただきました。
記して、お礼申し上げます（敬称略・順不同）。

法蔵禅寺、立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻、同志社大学歴史資料館、（公財）京都市埋蔵文化財研究所
西川秀敏、木立雅朗、リチャード・ウィルソン、鄭銀珍、竹中浩、浜中邦弘、若林邦彦、高橋潔、大立目一、畑中章良

1．京焼の源流—押小路焼—

初期の京焼　尾形乾山が著した技法書『陶工必用』には、京都押小路柳馬場の東で、陶工一文字屋助左衛門が押小路焼というやきものを生産していたと記される（裏表紙地図）。押小路焼は小型窯（錦窯（きんがま））を用い、低火度でやきものを焼成しており、この技法をやきもの作りに導入するために、乾山は、助左衛門の弟子にあたる孫兵衛なる陶工を乾山窯の開窯にあたって招いている。

野々村仁清が上絵付けによる色絵陶器を大成し、また乾山が多彩なやきものを生み出すためには、押小路焼にみられる内窯焼成という技法が重要な役割を果たした。それは、京焼がどのようにして出現したかということを解明するためにも重要な視点となる。

発掘された押小路焼　2003年から翌年にかけて、京都市役所の西、現・京都市立京都御池中学校の敷地内でおこなわれた発掘調査で、江戸時代前期のやきもの生産に関わる遺物が多数出土した。調査地点（1-1）は、押小路焼の場所として乾山が記した地点の南隣接地にあたり、押小路焼の実態を示す資料とみてよさそうだ。

内窯による低火度焼成の陶器（考古学では軟質施釉陶器と呼ぶ）には、椀や皿・鉢のほかに、茶入や灯明皿なども認められた。椀では、白化粧の後、外面に緑釉を施釉したものや、施釉前の素焼段階で、釉下色絵の下絵として、山水楼閣文が墨描きされたものなどがある（1-2）。舟形を呈する鉢も素焼段階で、内外面とも白化粧した後、内面には山水文、外面には波頭文を墨描きしている。これも釉下色絵の下絵である。乾山焼以外にほとんど類例の知られていなかった軟質施釉陶器の釉下色絵の技法が押小路焼に系譜をもつことを示す重要な考古資料とみてよいだろう。

刻印をもつ陶片　興味深いことは、低火度で焼成される軟質施釉の陶器のほかに、「音羽」・「清閑寺」・「清水」・「清」など、洛外の地名を示す印銘をもつ高火度焼成の施釉陶器や「岩倉」の印銘をもつ素焼の陶片も出土したことである。これらは、洛外に設けられた窯場で焼かれた初期京焼である。

「音羽」の刻印をもつ金彩色絵椀（1-3）は上絵付けが施されているが、多くは、上絵付けされる前に廃棄されている。登窯（のぼりがま）を用いて焼成された製品が持ち込まれ、この地で上絵付けが施されたと想定できる。乾山は、鳴滝窯を廃窯した後は、登窯は借窯（かりがま）をして操業するが、このような一種の分業体制が江戸時代前期にすでにみられることになる。

1-1 調査区全景（平安京左京三条四坊十町跡、北東から）
押小路焼に関連する遺物が多数出土した。

1-2 軟質施釉陶器（平安京左京三条四坊十町跡）
下絵として山水楼閣文が墨描きされている。

1-3 金彩色絵椀（平安京左京三条四坊十町跡）
底裏に、「音羽」の印銘をもつ。

2．鳴滝乾山窯跡の発掘調査

尾形乾山と乾山焼　東福門院御用達の呉服商、雁金屋の三男として生を受けた尾形乾山（1663-1743、幼名・権平）が創始したやきものが乾山焼である。都の北西（乾の方角）に位置する福王子村鳴滝泉谷に窯を開いたため、窯を乾山窯と呼び、製品を乾山焼と称した。のちに自身も乾山と号するようになる（以下、乾山を人名、乾山焼を製品、乾山窯を窯場の意味で用いる）。乾山の次兄は、斬新な意匠と装飾を生み出した画家の光琳（こうりん）（1658-1716）であり、絵付けによって乾山の作陶を助けた。

1699 年（元禄 12）から 13 年間、鳴滝で乾山窯を操業した後、1712 年（正徳２）、二条丁子屋町へ移転する。1731 年（享保 16）ごろ、乾山は江戸に下向したようであるが、この頃、聖護院門前で猪八（いはち）（二代乾山）が窯場を継承していたことが乾山の著した技法書（『陶磁製方』）に記されている。

昭和時代の調査　鳴滝乾山窯は昭和初年、春日純精によって発見された。春日は簡単な発掘調査を実施し、法蔵禅寺に附属する墓地の場所こそ、尾形乾山によって築かれた鳴滝乾山窯跡であると指摘した。これを契機に、蜷川第一や川喜田半泥子等も調査をおこない、鳴滝乾山窯であることを追認した。

1962 年、京都史談会によって『尾形乾山陶窯跡地』の石碑が建立されたが（2-1）、行政的に保護の対象となる遺跡（埋蔵文化財包蔵地）としては、長らく認知されることはなく、その間に墓地の開発などが進んでいった。鳴滝乾山窯跡が遺跡として、『京都市遺跡地図台帳』に記載されるのは、正式な考古学的発掘調査が着手された後、2003 年まで待たねばならなかった。

正式な考古学的調査　1999 年に開催された「乾山と京のやきもの」展（尾形乾山開窯 300 年・京焼の系譜）を契機として、翌 2000 年に法蔵禅寺鳴滝乾山窯址発掘調査団が結成され、京焼窯跡に対する初めての本格的な発掘調査が実施された。すでに、法蔵禅寺附属の墓地として開発が済んでいるという悪条件のなか、石碑建立地点や墓地のあいだ、本堂周辺に調査区を設置して、2004 年まで５次にわたって発掘調査がおこなわれた。

調査の概要　後世の土地改変のため、登窯本体を遺構として検出することはできなかったが、乾山焼に関連する多数の遺物をみつけたほか、乾山がこの地に窯を築く以前に存在した二條家山屋敷に関連すると想定できる石段遺構がみつかった。

石段遺構　乾山以前、二條家山屋敷に関連するとみられる（2-2、p. 10 参照）。螺旋状にめぐる石段とそれに続く砂利敷きの路面が検出されている。石段は蹴上げが

2-1 鳴滝乾山窯跡に建つ石碑（発掘調査前、2000 年、南から）

2-2 発掘調査で見つかった石段遺構（南から）

2-3 鉄絵「乾山」銘の製品（鳴滝乾山窯跡）

2-4 磁器の椀・鉢類（鳴滝乾山窯跡）

低く、通路には小砂利が敷き詰められている。優美な形状やその作りなどから、庭園の一部を構成するものとみられる。

出土遺物（製品・未製品）　高火度焼成品、低火度焼成品、素焼きの段階のものがあり、ほとんどが焼成時の失敗品とみてよい。角皿（2-6）、鉋目皿（かんなめざら）、土器皿、茶碗（2-5）、向付（むこうづけ）、蓋物、汁次（しるつぎ）など、多種多様な器形とともに、銹絵や染付、色絵など釉薬も多彩である。さらに、磁器の破片が一定数みつかっていることも注目される（2-4）。多くは、上絵付けがなされる前の未製品とみられるが、その出土量から判断して、磁器の焼成が安定しておこなわれていたことを想定させる。

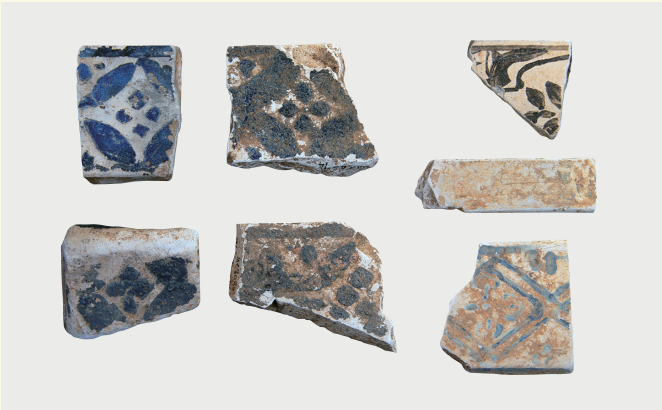
出土遺物（窯体・窯道具）　登窯の窯壁「オオゲタ」のほかに、小型窯である錦炭窯（きんすみがま）の窯壁が多数出土している。錦炭窯（内窯）の内面には、窯詰めのための突帯が設けられている。

窯道具としては、製品を収める匣鉢（さや）のほかに、製品の焼台となるトチンやピン・ピン台（2-9）などが出土している。トチンには、円盤形を呈するものと環状を呈するものがあり、前者には円錐形の脚がついている。小型の台形を呈するレンガも出土している。窯道具かとみられるが、その使い方ははっきりしない。

「乾山」銘　乾山の銘には、刻印（2-7）と鉄絵（2-3）の２種類が認められる。刻印は、椀などの小物の底裏（高台内部）に押捺されており、トチンに刻印が反転して残るものがある（2-8）。鉄絵の銘にも、トチンに反転して残存する例が目立つので、椀などでは底裏に銘をいれるものも多かったと想定できる。

聖護院窯に関係する乾山銘には、刻印による銘は出土していないこと、鉄絵の銘は簡略化していること、白地の四方囲いに描かれることなど、鳴滝出土例との違いを認めることができる。

2-5 椀（鳴滝乾山窯跡）
底部付近に鉄絵で「乾山」銘を入れている。



2-6 角皿・角向付の縁（鳴滝乾山窯跡）
型紙を用いて、七宝繋文・菱十字文を施している。

2-7 椀の底部（鳴滝乾山窯跡）
刻印「乾山」銘が底裏に見られる。

2-8 輪トチン（鳴滝乾山窯跡）
左側のトチンには、刻印が反転して残存している。

2-9 ピンとピン台（鳴滝乾山窯跡）

３．京大病院構内の発掘調査と聖護院乾山窯

病院構内の遺跡　京都大学吉田キャンパスの南端に位置する病院構内では、1976 年、医療技術短期大学部（現・医学部人間健康科学科）の校舎建設にともなって、発掘調査が初めておこなわれた。それ以来、校舎等の建設に先立つ調査が実施され、縄文時代から近代にいたる土地利用の変遷と人びとの暮らしぶりが遺構や遺物の発見によって明らかになってきた。

江戸時代の病院構内は、南半が聖護院村、北半が吉田村に含まれていた。多くの調査地点で、耕作用井戸・肥だめ・柵列・あぜ道などがみつかており、畑地が広がっていたことが明らかになっている。

地下駐車場建設に伴う調査　2001 年、地下駐車場建設に伴う調査が病院構内東南辺で実施された（3-1）。この調査では、多量の土器・陶磁器を廃棄したゴミ穴や区画溝・池・井戸など、江戸時代の遺構・遺物がみつかった。聖護院村の町並みの北辺にあたり、この辺りは、寺院や町屋が散在する都市的な景観を呈していたのであろう。この町並みを構成する一画から、江戸時代中期の乾山焼や幕末の蓮月焼といったやきもの生産に関わる遺物が多数出土した。

乾山焼関連資料　乾山焼と判断する製品・未製品には、角皿・額皿（3-5）・椀（3-4）・向付（3-3）・土器皿・水指？などがあり、低火度焼成品（軟質施釉陶器）と高火度焼成品及び素焼が含まれている。

低火度焼成品には、銹絵山水図の角皿や銹絵画賛様式の額皿などがあり、椀や土器皿には宝珠文（ほうじゅもん）が描かれている。宝珠文は、鳴滝にはみられない意匠であり、聖護院門跡に伝世する乾山焼に、この意匠が用いられていることと関連するであろう。

高火度焼成の輪花向付は同型品が複数出土している（3-2）。白化粧を施し、底裏には白化粧地に四方囲いの「乾山」銘を入れる。上絵付け（椿文）がなされた陶片とそれがない陶片という製作段階を異にする資料であることが注目できる。「省」と「爾」字型の花押が残存する陶片もある。これらも、鳴滝乾山窯では出土していない製品や銘である。

窯に関連するものとして、トチン類や錦炭窯の外窯・内窯や小孔を多数もつ小型の内窯がみつかっているが、鳴滝で出土している匣鉢（さや）はほとんど出土していない（3-6）。匣鉢は登窯で使用される窯道具であり、聖護院では登窯はなかったと想定してよいだろう。

小孔をもつ内窯は、二代乾山が著した技法書『陶器密

3-1 乾山焼資料が出土した発掘調査（京大病院構内、西から）
西から見る。背景に見える山は、大文字山。

3-2 乾山焼　橋文輪花向付（京大病院構内）
同型品であるが、製作段階を異にする。

3-3 乾山焼　向付（京大病院構内）

3-4 乾山焼　椀（京大病院構内）

3-5 乾山焼　額皿（京大病院構内）

法書』に黒楽焼成窯として描かれた「吹子窯」（ふいごがま、3-7）の内窯に酷似している。出土した窯壁には、内面のトチンを中心に黒楽釉が付着しているものがあり、これが黒楽焼成の小型窯（吹子窯）として使われたことは間違いないだろう。

文献にみえる聖護院乾山窯　聖護院窯に関しては、乾山が江戸に下向した後、下野国佐野（現在の栃木県佐野市）で記した技法書『陶磁製方』（佐野伝書・1737 年）に記述がある。該当する箇所を引用してみよう。

光琳このミ置候通ヲ用　又ハ私新意ヲも相交　愚子猪ハニ伝　唯今ハ京鴨川ノ東聖護院宮様御門境ニ而本焼内焼共相勤罷有候

兄である光琳のデザインや自分の開発した工夫などが「愚子猪八」（二代乾山）に受け継がれて、現在では洛東の門跡寺院聖護院の門前で、窯場が操業され、乾山焼が製作されているというのが大意である。

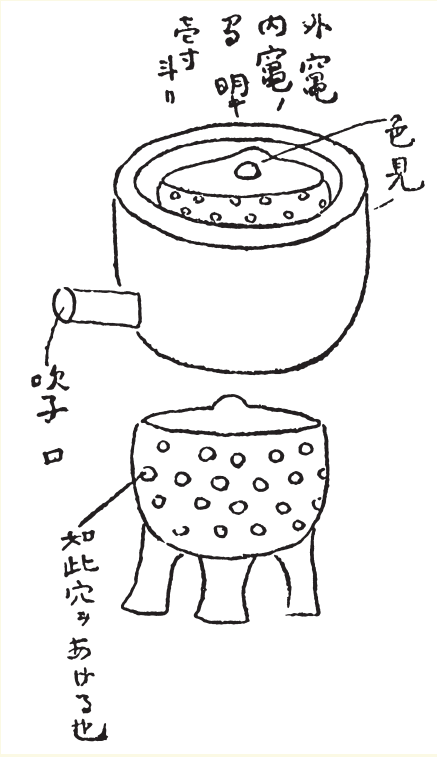
通説では、鳴滝→二条丁子屋町→聖護院へと乾山焼窯場（工房）が移動したと想定されている。1712 年の鳴滝から二条丁子屋町への移動は、『京都御役所向大概覚書』にみえるが、二条丁子屋町から聖護院へといつ・どのような理由で移動したのか、また初代と二代の関わり方などは、はっきりしない。都から遠く不便な鳴滝から二条丁子屋町への移動は、本格的な町売りをするためと解されている。御所の南に位置するこの場所は、商売をするためには確かに適した場所である。そうであるなら、二条丁子屋町へ移動した直後からそうであったとは言えないにせよ、ある時から、二条丁子屋町と聖護院は一体として存在し、二条丁子屋町は店舗、聖護院は製作工房としての機能を担ったと想定することもできる。

乾山はなぜ、門跡寺院聖護院領内に工房を開いたのであろうか。そこには乾山の周到な戦略が働いたとみるべきである。乾山が最初に窯を開いた鳴滝は宮門跡仁和寺領内であり、初窯の製品は仁和寺へ献上されている。鳴滝窯の地は、五摂家の一つである二條家の旧別荘地であり、二條綱平には乾山焼がたびたび献上されている。有力寺院や有力貴族の庇護は窯場の維持や完成した製品の流通にとって大きな力となったことであろう。聖護院には、おそらく献上品とみられる乾山焼の茶道具一式が伝世している。宮門跡聖護院の庇護を乾山が欲したとしても不思議ではあるまい。

もう一つ重要な視点として、地の利の問題が指摘できる。二条丁子屋町へ移転して以降、高火度焼成品は、粟田口や五条坂の京焼窯場に借窯をして焼成されている。さきに二条丁子屋町が店舗として機能した可能性を指摘したが、この想定が正しいのであれば、二条丁子屋町と粟田口などの京焼窯場の両者にアクセスしやすい場所に工房を置くことが理に適っているであろう。

二条丁子屋町と聖護院、聖護院と粟田口のあいだは２km弱の距離。「聖護院宮様御門境」で工房を開くことになったのは、二条丁子屋町や京焼窯場の粟田口に近いという地の利と宮門跡聖護院という有力寺院の庇護のもと経営をおこなうという戦略が働いた結果であろう。

3-6 窯部材・窯道具（京大病院構内）
小孔を多数もつ小型の窯は、黒楽焼成用のふいご窯。



3-7『陶器密法書』に描かれた「吹子窯」

4．江戸時代の聖護院村

門跡寺院聖護院　京都大学病院構内の南半は、江戸時代には聖護院村に含まれていた。聖護院という地名は、平安時代中期に創建された聖護院に由来し、この寺名が村名として定着したものである。聖護院は親王や摂家出身者が門跡となる門跡寺院であり、天明の大火（1788年）や1854（嘉永７）年の火災で禁裏御所が焼失したときには、仮御所となったこともある。

聖護院村は全域が聖護院領であった。聖護院と熊野神社が中心となり、鴨川をはさみ都と直結する村として、江戸時代には独自の展開をたどった。

文化人の集う都市近郊農村　聖護院村では多くの種類の蔬菜が栽培された。こうした蔬菜には聖護院大根・聖護院蕪などのブランド名がつくようになり、聖護院村は都市近郊農村として発展していった。その一方、江戸時代中期ごろから多くの文化人がこの地に居を構えるようになり、幕末には、大田垣蓮月（おおたがきれんげつ）・税所敦子（さいしょあつこ）・中島棕隠（なかじまそういん）・貫名海屋（ぬきなかいおく）・小田海仙（おだかいせん）らが熊野神社周辺に居住していた。

大田垣蓮月は、自詠の和歌を刻んだ煎茶器を作り、煎茶趣味の流行とも相まって、蓮月焼として大いにもてはやされた。この蓮月焼が乾山焼の出土地点とほぼ同じ場所から出土している。18世紀中頃の乾山焼と19世紀中頃の蓮月焼では、ほぼ１世紀の時間差があり、その間に直接的なつながりは認められない。それでも両者がこの地に工房を開いたのには、都に至近であり、粟田口などの京焼窯場とも近い（ともに借窯をしている）、聖護院門跡領内で文化人の集うサロン的な雰囲気が存在したなど、共通する要因があったとも考えられる。

江戸時代の土器・陶磁器　京都大学吉田キャンパス一帯のほとんどは、江戸時代には田畑が占めていたが、病院構内の東南辺には聖護院村の町屋が広がっていた。発掘調査では、井戸などとともに、当時使われた生活道具が大量に出土している。下に示した土器・陶磁器類は、乾山焼関連資料が出土したのと同じ廃棄土坑から出土したものである。土師器の皿・焙烙（ほうろく）、陶器の椀・鉢・火入れ・すり鉢、磁器の椀・皿・仏飯（ぶっぱん）などから構成されており、18世紀中葉～後葉に属している。

このなかに飛び抜けて古い陶片が含まれていた(4-2)。黒褐色の粗い胎土に漆黒の釉が厚くかかっている天目椀（てんもくわん）である。酸化鉄の結晶が細かな筋となって現れている禾目天目（のぎめてんもく）で、中国・福建省建窯で13世紀代に生産された優品である。古い時代の資料が偶然混じり込むことは考えられるが、優品であるだけに、聖護院での伝世品、あるいは乾山が入手した伝世品が毀損し、廃棄された可能性も考えてみたい資料である。

4-2 禾目天目椀（京大病院構内）
13世紀、中国・建窯で製作された優品。伝世したものか。

4-1 乾山焼と一緒に出土した土器・陶磁器（京大病院構内）

5．錦炭窯の復原と焼成実験

用途・機能の推定　過去の遺構や遺物は、一般に用途や機能が停止された状態でみつかる。それを使用した人の証言も得ることはできないため、用途・機能を直接知ることは困難である。そこで、考古学では、民俗・民族資料からの類推、遺物に残された痕跡の詳細な観察、出土状況の分析などから機能・用途を推定するが、この一つの方法として実験考古学がある。実験考古学は、製作実験や使用実験をおこない、実際の遺物・遺構との比較分析を通して、機能･用途を復原しようとするのである。

錦炭窯（きんすみがま）の復原　立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻の木立雅朗を中心とするグループでは、鳴滝乾山窯より出土した窯壁片に基づいて、小型窯の一つである錦炭窯を復原している。そして、角皿・鉋目皿などを復原製作し、復原した錦炭窯を用いて、焼成実験をおこなっている。その成果を紹介してみよう。

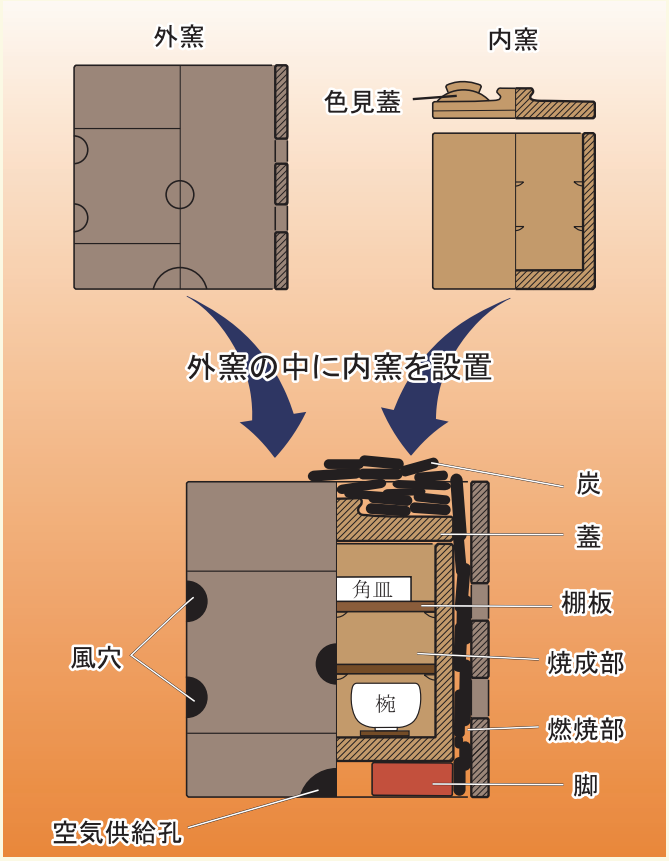
錦炭窯は、内窯と外窯および蓋からなる。出土窯片の詳細な観察に基づいて、陶土（信楽赤土８割、シャモット１割、童仙坊１割）を調整し、粘土紐を水平接合で積み上げ、外窯の径 55cm 前後のもの３基を製作した。内窯はそれらより一回り小さく、外窯と内窯のすきま（燃焼部）は、狭いもので 25 ～ 35mm、広いもので 35 ～ 50mm とした。

製作・焼成実験　出土遺物の技法の観察に基づき、できるだけ当時の技術に忠実に、角皿や鉋目皿、椀などが復原製作され、焼成された。

角皿には側壁面と底部を別作りして貼り合わせる方法と型に粘土板を被せて型打ちによって成形する方法が出土品に観察される。このうち、前者の別作りによる成形は、復原が難しく、接合面が乾燥中に破損する事例が多く生じた。同様の破損は出土品にも認められた。それに対して、鉋目皿は器面を削り取るだけの単純な製作技法で、ほとんど失敗することはなかった。

伝世品には、灰被りの痕跡が底面にみられるものが存在する。実験では、裏側を上に向け上段に窯詰めした製品に同様の現象が確認できた。

３基復原された錦炭窯うち、１号窯では 17 回の焼成実験をおこなっている。外窯と内窯のすきまと蓋の上に炭を充填し、燃焼する。焼成温度は最高で 800 度台後半である。第１回の実験で､外窯にはヒビ割れが生じたが、針金による補修を施すことで、焼成を繰り返すことは可能であった。焼成回数を重ねることで、特に内窯外面には白濁した鮫肌状の釉薬が熔着するようになった。



5-1 錦炭窯の復原模式図（原図：木立雅朗）

5-2 錦炭窯の窯詰めの状況
内窯のなかに施釉した製品を詰めた状態。

5-3 錦炭窯による焼成実験
外窯と内窯のあいだに詰めた炭が燃焼しているところ。

6．尾形乾山と二條綱平

尾形家と二條家　東福門院御用達の高級呉服商であった尾形家と五摂家の一つである二條家は、文化サロンを通じて交わりが深く、光琳や乾山は早くから二條家に伺候していた。関白となる二條綱平（つなひら）（1672-1732）は、当時の公家文化を体現していた人物であり（6-1）、光琳や乾山の庇護者としての役割も果たしていたようだ。乾山焼は、年始の祝儀として綱平にたびたび献上され（『二條家内々御番所日次記』）、1701 年（元禄 14）、光琳が法橋（ほっきょう）（僧位の一つで江戸時代には絵師の叙任例が増える）に叙せられたのは綱平の推挙によるものであった。

鳴滝泉谷山屋敷　1694 年（元禄 7）、乾山は、福王子村鳴滝泉谷にあった二條家の山屋敷を拝領し、1699 年（元禄 12）、ここで乾山窯を開窯する。この山屋敷は、『御室御記』には「鳴瀧二條殿御茶屋」と記されており、皇族も訪れる由緒ある地であった。この頃、皇族や公家たちは洛外に別荘を持ち、そこに御茶屋を設けた。御茶屋では歌舞音曲が催されるとともに酒宴が開かれ、公家文化の一種のサロンとして、文芸・遊興の場となっていた。

乾山がこの地を二條家より拝領できたのは彼の家柄によるのであろうが、開窯するにあたっては、公家文化のサロンとして機能していた空間で、やきものを通して新たな文化を生み出そうとする芸術家としての意識が働いていたに違いない。

6-1 二條綱平肖像画（部分）

二條家邸宅跡出土乾山焼　二條家の旧邸宅は、御所の南側に所在したが、17 世紀中頃に北側へと移転した。現在この地には同志社女子大学・同志社女子中高等学校が所在する。2013 ～ 14 年にかけておこなわれた校舎建設に先立つ発掘調査において、二條家の家紋をあしらった特別注文の瓦や磁器、禁裏より下賜されたとみられる磁器などとともに、乾山焼が出土している。

出土品には、低火度焼成の角皿や高火度焼成の鉢・汁次などのほか、磁器質の鉢も認められる。角皿の縁文様は、型紙を用いて意匠を描いている。鉢は、底裏（高台内部）に鉄絵で「乾山」銘を入れている。乾山焼は火を受けているものがあり（6-2）、天明の大火（1788 年）で焼失したものが廃棄されたとみられる。廃棄年代のわかる重要な考古資料である。

乾山は二條家にたびたび伺候（しこう）し、年始祝儀などとして乾山焼を献上している。発掘調査で出土した乾山焼は、文献に記された献上品にあたる可能性が高いであろう。

6-2 乾山焼　角皿（二條家邸宅跡）
天明の大火（1788 年）で火を受け、廃棄されたとみられる。

6-3 乾山焼　鉢（二條家邸宅跡）
底裏に鉄絵で「乾山」銘を入れている。

尾形乾山略年表

1663（寛文３）	１歳	京都の呉服商尾形宗謙の三男として誕生。幼名、権平。次兄は市丞（のちの光琳）。
1687（貞享４）	25 歳	父・宗謙没（67 歳）。家屋敷・金銀諸道具などの遺産を受け継ぐ。
1689（元禄２）	27 歳	仁和寺の門前、双ヶ岡の麓に習静堂を建てて隠棲する。
1694（元禄７）	32 歳	福王子村鳴滝泉谷にある山屋敷を二條家より拝領する。
1699（元禄 12）	37 歳	３月、仁和寺へ開窯を願い出て許可される。９月、窯を築く。 11 月、初窯。乾山焼と命名し、仁和寺門跡へ茶碗を献上する。
1700（元禄 13）	38 歳	３月、二條綱平（1672-1732）へ乾山焼香炉を献上。その後 20 年近くにわたって、二條綱平へ乾山焼を献上する。
1712（正徳２）	50 歳	鳴滝乾山窯を廃窯する。二条丁子屋町へ移転し、「焼物商売」を継続する。
1731（享保 16）	69 歳	輪王寺宮公寛法親王に従って江戸に下向か。猪八（二代乾山）、聖護院門前で乾山焼を生産する（聖護院乾山窯）。
1737（元文２）	75 歳	３月、技法書『陶工必用』完成。９月、下野国佐野を訪れ、『陶磁製方』執筆。
1743（寛保３）	81 歳	６月２日、乾山没。
1744 ～ 1747（延享１～４）		二代乾山、聖護院門前で、乾山窯を継続か（「延享年製」銘の火入あり）。

展示品目録

種　類	遺　跡　名	点数	時　代	所　蔵
１．京焼の源流―押小路焼―				
軟質施釉陶器	平安京左京三条四坊十町跡	7	17 世紀	（公財）京都市埋蔵文化財研究所
施釉陶器	平安京左京三条四坊十町跡	9	17 世紀	（公財）京都市埋蔵文化財研究所
窯道具・窯	平安京左京三条四坊十町跡	9	17 世紀	（公財）京都市埋蔵文化財研究所
２．鳴滝乾山窯跡の発掘調査				
乾山焼　製品・未製品	鳴滝乾山窯跡	24	18 世紀	法蔵禅寺
窯道具・窯	鳴滝乾山窯跡	45	18 世紀	法蔵禅寺
３．京大病院構内の発掘調査と聖護院乾山窯				
乾山焼　製品・未製品	聖護院川原町（京大病院構内）	48	18 世紀	京都大学文化財総合研究センター
窯道具・窯	聖護院川原町（京大病院構内）	35	18 世紀	京都大学文化財総合研究センター
ふいご窯（復原）		1	現代	立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
４．江戸時代の聖護院村				
土器・陶磁器	聖護院川原町（京大病院構内）	33	18 世紀	京都大学文化財総合研究センター
禾目天目椀	聖護院川原町（京大病院構内）	1	13 世紀	京都大学文化財総合研究センター
５．錦炭窯の復原と焼成実験				
錦炭窯（復原）		2	現代	立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
角　皿（復原）		1	現代	立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
鉋目皿（復原）		1	現代	立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
６．尾形乾山と二條綱平				
乾山焼　製品	常磐井殿町（二条家邸宅跡）	6	18 世紀	同志社大学歴史資料館

参考文献

京焼の源流

京都市埋蔵文化財研究所　『平安京左京三条四坊十町跡』2004 年

京都市埋蔵文化財研究所　『地中の京焼』リーフレット京都 243、2009 年

鳴滝乾山窯

法蔵寺鳴滝乾山窯址発掘調査団・立命館大学文学部　『鳴滝乾山窯跡』2005 年

聖護院乾山窯

京都大学埋蔵文化財研究センター　『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002 年度』2007 年

錦炭窯の復原と焼成実験

木立雅朗・瀬戸口陽子編　『「金炭窯」の復原と焼成実験』立命館大学木立研究室、2013 年

尾形乾山と二條綱平

同志社大学歴史資料館　『常磐井殿町遺跡・公家町遺跡・相国寺旧境内発掘調査報告書 2018』2019 年

全　体

リチャード＝ウィルソン・小笠原佐江子　『尾形乾山　全作品とその系譜』雄山閣、1992 年

リチャード＝ウィルソン・小笠原佐江子　『乾山焼入門』雄山閣、1999 年

＊このほか、図録類等を多数参照したが、割愛させていただいた。

京都大学総合博物館 平成30年度特別展・文化財発掘Ⅴ

発掘　乾山窯

2019年2月20日～2019年4月21日

2019年2月20日発行
編集・発行　京都大学文化財総合研究センター
〒606-8501　京都市左京区吉田本町
http://www.kyoto-u.ac.jp/maibun/